

クローズアップ

NGO・NPO

環境 NGO

イカオ・アコ

マングローブの植樹による 環境保全への取り組み

イカオ・アコは国際NGOとして一九九五年に設立され、地球環境保全の理念を掲げて、フィリピンのマングローブ植樹等を中心に活動しています。

今回、フィリピン・ネグロス島で二月に行われた第四七回植樹ツアーに参加し、活動の一部を実際に体験してきました。その様子を交えながらイカオ・アコについて紹介いたします。

環境NGOイカオ・アコ

「イカオ・アコ」とは、主な活動地であるフィリピン・ネグロス島西部の言語であるイロンゴ語で「あなたと私」という意味です。

イカオ・アコの代表である日本福祉大学に勤める後藤順久先生は、イカオ・アコを設立し、マングローブの植樹を通じて失われた森を再生しようという目的の下、「イカオ・アコ」の名前の通り、現地自治体・大学などと共にマングローブ植樹プランを作成し、地域の人たちと一つになって活動しています。

イカオ・アコでは活動の一環として、日本に住む人たちにも現在のネグロス島やフィリピンの現状や地球環境に意識を向けてもらうため、年に四〜五回、マングローブの植樹ツアーを実施しています。

さらに、現在、京都議定書における二酸化炭素削減の公的な認承を得るために手続きを進めています。

マングローブの植樹

マングローブは、熱帯性または亜熱帯性気候の海水が混じった水が届く所で林を作ることができる植物のグループの名称であり、バカオ、パガバット、ブンガロンといった種類があります。それぞれの木は、海水や柔らかい地面に適応するため独特な形の根や葉、種を持っています。海岸線や塩分濃度が高い湿地には植物が育ちにくいいため、フィリピンのような熱帯の島では、マングローブがなくなると木のない荒地が増えています。

東南アジアは世界中で最もマングローブの種類が多い地域ですが、近年、多くのマングローブ林が魚の養殖池や塩田、住宅地に変えられ、さらには、燃料用の炭や薪として伐採されています。ネグロス島も例外ではなく、ここ五〇年で九〇%以上伐採され、海岸線がむき出しとなり、台風や高波により海岸付近の村に被害が出ています。

成林したマングローブ林は、村を高波や洪水から住宅を守ると同時に、様々な生き物の住処となるため、住民たちの食料の供給源となっています。植樹によりこれまで失われた森を取り戻すことは、自然や環境を守るだけではなく、人々の暮らしを守ることにもつながっています。

フィリピン・ネグロス島

ネグロス島は、南北に三七二kmと長い長靴のような形をした島です。フィリピンの中央部、ビサヤ地域の西部、セブ島とイロイロが

(環境NGO) イカオ・アコ

〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田 日本福祉大学内 TEL 0569-87-2319
代表 後藤 順久

あるパナイ島の間に挟まれた所に位置し、フィリピンの中では五番目に面積が大きい島です。

イカオ・アコの活動は主にネグロス島の西半分を占める西ネグロス州で行われており、中でも、シライ市バラリン村は、活動開始当初から植樹による地域活性化に力を入れています。

第二次世界大戦中に当時アメリカ統治下であったフィリピンは、一九四一年から約四十年間、日本軍に占領されていました。その中でもシライ市は、ネグロス島で最後まで日本兵が居残った場所でした。シライ市で通信部隊の小隊長を務めていた故土居氏は、日本軍から教会を爆破するようにと渡された爆弾を海に放棄するなど、現地の人に対して思いやりのある行動をしていたため、地元の人から愛されていました。土居氏は戦争後も残留していた日系二世たちの支援のために何度もネグロスに足を運ぶ中で、現在のイカオ・アコ代表である後藤先生と出会い、「地元の人のためになる活動はないか」と協議した結果始めた事業が、現在のマングローブの植樹だったというわけです。そして、その活動は現在でも続けられ、これまでに約一〇万本ものマングローブが植樹されてきました。

なサポートを受け、今回の植樹ツアーにおいても、到着の翌日、市長から全職員を集めたフラッグセレモニーで植樹に参加したメンバーの紹介がありました。



↑シライ市長からの委嘱状

また、何名もの職員が、植樹作業や活動地までの運転など様々な部分で支援をしてくれています。シライ市全体が、イカオ・アコの活動をサポートすることで、自分たちの住む島の自然を守ることに真剣に取り組んでいることが窺えます。

また、植樹されるマングローブの苗木を育てることや、植樹後のマングローブの管理等に関しては、バラリン村を中心に活動する団体BAMPA（バンパ）を中心に、現地の環境保護団体や小中学生が行っています。

イカオ・アコは日本国内では後藤先生を中心に運営されていますが、活動地であるネグロス島では、駐在員として現地に住む倉田さんが、植樹したマングローブの管理やシライ市や関係団体との連絡・調整業務などを行っています。また、倉田さんはネグロス島にあるフィリピン工業大学で日本語クラスのアシスタントもしており、イカオ・アコ、ネグロス島双方にとってなくてはならない存在です。

植樹活動は、現地の行政、大学、地域コミュニティに支えられ、共に行動することで成果をあげています。

第四七回植樹ツアー

二〇〇九年二月一五日～二二日に実施された第四七回植樹ツアーには、大学生から社会人、定年を迎えられた方など、幅広い年代の合計一〇名が参加し、現地駐在の倉田さんを加えた一一名が、シライ市をはじめとする植樹地の住民と共に、ネグロス島でマングローブの植樹に取り組みました。日本にいないだけでは目にするのでできない環境破壊の現状や、その地域に住む方々の暮らしに対して理解を深めることができました。

二月一五日に日本を出発した後藤先生をはじめとする六名の参加者はフィリピンに着後、翌日から植樹を開始しました。初日はバラリンの海岸で、日本からの参加者のほか、現地の小学生が授業の一環として、また、市内のガールスカウトも活動として植樹に参加し、合計一〇〇名以上による植樹となり、一日で約二〇〇〇本のパガパットの苗を植えることができました。

翌日は、カリリン村へ移動しての植樹となり、この日も小学生とネグロス農業大学の学生が作業に参加し、約八〇〇本のブンガロンの苗を植えました。

一八日からは、カイハガンの海岸でバカオの苗を植え、一九日に先発隊と私を含めた後発隊が合流し、バラリン村に戻り、ツアー参



↑植樹の様子



↑植樹をした仲間たちと

加者全員揃って植樹を行いました。

田んぼのようにぬかるんだ地面に、足を取られながら海岸まで歩き、穴を掘った地面に、あらかじめ二か月程度育てておいたポット苗を植え、穴を埋める。一見簡単そうですが、実際に自分でやってみると大変な作業でした。成長したときに養分が十分行き届くように約二メートルの間隔をあけながら植えていくと、一時間も経つと、一〇〇メートルほど奥まで進まなければなりません。また、潮が引いている時間しか植樹ができないため、事前に潮の満ち引きの時間を確認し、限られた時間での作業となります。

地元の住民たちと協力し合いながらマングループを植える作業は、共に働く連帯感や充実感を感じることができ、非常に貴重な機会となりました。

今回の植樹ツアーでは、約一週間で七〇〇〇本以上のマングループの植樹を行うことができました

ツアー中は、植樹地でのマングループの植樹のほかにも、ネグロス島の主要産業である製糖の工場の視察や、市の中心地の見学、

さらには地域の学生の団体やガールスカウト、地元で暮らす方々との清掃作業もプログラムとして実施され、人々の暮らしや文化に触れることもできました。

一〇日は、午前中の植樹の後、午後は倉田さんが日本語アシスタントを務めるフィリピン工業大学を訪問し、日本語を学ぶ学生たちと交流する時間となりました。

フィリピン工業大学では、日本語を学ぶ学生が多く、グループに分かれて、日本語を使っている発表を私たちに見せてくれました。また、日本からの参加者への質問時間が取られ、日本の文化や社会について多くの質問を受けました。彼らは日本への興味・関心が非常に高く、いつか日本に行ってみたいと目を輝かせながら語る学生の表情がとても印象的でした。

企業との連携

今回の参加者の一人である多田さんは、イカオ・アコの協賛企業であるコンピュータ部品製造の企業に勤めています。イカオ・アコの活動に賛同し、自社製品の使われたパソコン一台の売り上げにつき一本のマングループの苗をイカオ・アコに寄付しており、会社をあげてのエコプロジェクトとして、地球環境保護活動を推進しています。また、パソコン購入者には植樹証明書を発行し、実際に活動に携わることがない一般の方にも目に見える形での環境保護への意識を高めることができるよう取り組んでいます。

今回、多田さんは、企業のプロジェクトの成果がどのように現地で活かされているのかを自分の目で確かめるとともに、自らの手でも植樹することにより環境保護についての理解を深めていました。

近年、多くの企業が環境保護への取り組みを重視していますが、その際、企業では手の届きづらい部分について、NGO等の団体と協働することで、効果的な活動ができます。最近では、後藤先生のもとに、活動について企業からの問い合わせも増えているとのこと。企業のバックアップを得て、より充実した活動に結びつけることができるため、後藤先生は、今後も企業との連携をしていきたいと話してくれました。

植樹の苦労と課題

マングループは淡水と海水が混じり合う土地を好みます。植樹を行う場合、ほとんどが海岸沿いに植えられますが、海岸付近の土壌は柔らかく、また、植樹をしても根付くまでに時間が必要であるため、台風や大雨によってせっかく植えた苗が流されてしまつことがあります。実際、昨年一月に植樹を行った海岸では、その後の天候により、植えた苗の一部が失われていました。

しかし、その中でもたくましく育つマングループも見られ、活動の成果は目に見える形で表れてきています。今後の継続的な活動が望まれます。

地球環境の保護については政府レベルでも

対応がされています。

温暖化防止の温室効果ガスの削減・吸収事業を先進国と途上国が共同で実施し、先進国の技術を利用し途上国において事業を実施した結果、生じた温室効果ガスの削減分の一部を先進国がクレジットとして得て、自国の削減に充当できる仕組みであるCDM（クリーン開発メカニズム）という制度がありますが、その枠組みはマングローブ植樹の場合には審査が厳しく、適用が難しいそうです。

しかし、イカオ・アコでは、その中で周囲の理解と協力を得て活動を続けていくことを今後の目標として掲げています。

イカオ・アコの活動について

イカオ・アコは環境NGOとして、植樹だけでなく、それから派生する文化交流や教育交流など関連事業も行っています。

植樹ツアーの際には現地の小学生から大学生など多くの子どもたちも参加しており、環境教育としても大きな役割を果たしています。

また、提携団体のひとつフィリピン工業大学の優秀な学生に対して、奨学金を交付しています。財政的な事情により大学に通うことのできない子どもが多いフィリピンで、優秀な学生に学業を全うしてもらいたいという願いが込められています。

その他、国内でもマングローブの大切さや植樹ツアーへの参加を呼びかける普及啓発の活動をしています。提携している愛知県

内の私立高校や、NGOのイベントなどで、出前授業を行ったり、交流活動に参加したりしています。

植樹ツアーを終えて

今回、ツアーに参加して感じたことは、現地の人たちの温かさや優しさです。

以前にも植樹の経験を持つ何人かの参加者に、植樹ツアーに参加する理由について尋ねると、環境保護のためという答えとともに、現地の人との交流ができることが挙げられました。それほど参加者にとって、人との交流は印象深いものだったことだと思います。

ネグロス島はすべての地域が経済的・環境的に恵まれているわけではありません。島の中心部には、日本でも見ないほどの大型のショッピングセンターが建っており、多くの人で賑わっていますが、郊外では電気が通っていない地域も少なくありません。バラリン村の植樹地近くのレストランでは、取り外した車のバッテリーを使って電力を得ています。

しかし、そういった環境にもかかわらず、そこに住む人たちは明るく、そして温かく私たちを迎えてくれ、ともに植樹をした現地の学生や大人たちは、私たちを同じ目的のために活動する仲間として認めてくれたように感じました。また、現地で交流した子どもたちの中には、まだ幼く、イロゴン語しか話せない人もいたため、言葉でのコミュニ

ケーションが取れない場面もありましたが、交流の中で、言葉は通じなくても彼らの優しい気持ちが伝わってきました。

植樹活動はすぐに結果が出るものではなく、植えた苗が立派な木として育つまでには多くの時間が必要です。今後のイカオ・アコの活動を通じて、多くの人が環境問題に対して興味、関心を持つことで、共に植樹を行ったフィリピンの子どもたちが成長したときに、ネグロス島がマングローブの森を取り戻し、彼らの暮らしを守るとともに地球規模の環境保護が少しでも進むよう願っています。

後藤先生、倉田さん、ネグロス島の皆様、そして第四七回植樹ツアーの参加者の皆様へ感謝申し上げます。



↑子どもたちと習字で交流